

韓国 の 古 代 山 城 を 歩 く

高 句 麗 の 城 郭 を 中 心 に し て

— 臨津江流域、漢江流域の高句麗城郭を歩く —

寺 岡 洋

は じ め に

2006年11月、古代山城研究会は韓国の山城踏査とあわせ、中原文化財研究院（清州）において第35回例会・セミナーを開催した。これについては前号（220号）で内容を紹介した。例会は仁川空港で現地解散したが、さらに臨津江（イムシンガン）流域の高句麗城郭、安城竹州山城、風納土城、仁川桂陽山城、寺院などを見て周った。

臨津江の流れを目にしたことはなく、フォークソングのイメージのみ先行していた。ところが、この歩いたこともない臨津江流域の論文を訳したので現場をぜひ見たかった（白種伍「韓半島臨津江流域の高句麗關防体系」『朝鮮古代研究』5 朝鮮古代研究刊行会 2004）。後日、白種伍氏から多くの資料を頂いたのだが、現地を歩いてないのでどうかしい思いをずっと抱いていた。

臨津江流域は車がないと無理で、今回運転はむろん目的地への道もすべて松波宏隆（龍谷大）さんに全面的にお世話になったものです。

2007年1月。むくげの会新春例会は昨年に続いて韓国でやろうとなり、ソウルに足場をもつ足立さんのお世話になった。それにあわせて早めに出来かけ、ソウルに所在する高句麗・峨嵯山（アチャサン）堡壘群、阿且山城、夢村土城、出土遺物を展示するソウル大博物館、国立中央博物館などを見て周った。後日のため、メモを残しておきたい。

I. 臨津江流域を訪ねて

龍尾里（ヨンミリ）石仏 普光寺（ボグァンサ）

11月26日昼下り、レンタカーは現代の黒塗りソナタ。まずは、仁川桂陽山城への道を確認する。ソウル外郭循環高速道の桂陽（ケヤン）IC下車。

道路地図に表示あり。登り口は小公園。暗くなつたころ漢江を渡り、ヘンジュチマで名高い幸州山城の傍を通って高陽へ。オンドルパンのあるモーテルに泊まり、イドゥンイカルビで晩飯。

11月27日、朝、小雨だが雨に。直線距離ならば真北へほぼ10km、坡州市龍尾里石仏へ。途中、馴染み薄い地名が多く交通標識を見てもパッと分らない。軍の車両が目立つて多くなる。

宝物に指定されている石仏立像は出かける値打ちがある。お姿に銃痕が残るのが痛ましい。

普光寺は揚州市との境に近い山中。梵字の調査。雨中にお寺の伽藍のたたずまいが好ましかった。韓国でお寺を訪れる人は観光客もむろんいるが、祈るために来られる人も少なくないようだ。

坡州（パジュ）・徳津（トックチン）山城

普光寺から20kmばかり北上し、汶山の東で臨津江の堤防にぶつかった。汶山から統一大橋を渡れば板門店。ちょうど橋があったが、軍の検問所があり、これはあかんと早々に退散。

臨津江流域の城郭については、『高句麗遺跡の宝庫 京畿道』（京畿道博物館 2005）をもっぱら頼りにした。徳津山城については、「大韓文化財新聞」（21号 2004）にも紹介されている。

徳津山城は、臨津江の中の島である草坪島の対岸の丘陵（海拔85m）に造られた、全長984mの山城。山城の両翼に渡し場があり嚮導保塁（交通路の監視・防衛拠点）と評価されている。

2004年に調査され、三国時代から朝鮮時代まで多くの遺物が出土した。高句麗土器と格子文瓦片が多く含まれており、高句麗の保塁があったと推定されている。炭化米や木葉文軒丸瓦が出土しているのが注目される。軒丸瓦を使用するような

格の高い建物があったようである。

現存の石築城壁は新羅、土城は朝鮮時代のもののように徳津壇（祭祀）関連かとも言われる。

徳津山城は軍事統制地域内にあり、城周辺は地雷原で充分に調査できない、との担当者の言。

坡州・七重城（チルジュンソン）

臨津江を眺めながら上流に走り、坡平で江辺を離れ坡州市積城へ。国道37号線傍らの重城山（海拔149m）に七重城は位置する。駐車場あり。

臨津江流域の眺望は抜群だった。国連軍英國部隊と中国軍の激戦地と説明版にある。城内は城壁に沿って塹壕が掘られ、車両用掩体壕も多い。

七重城の総長は603m、包谷式山城。一部に補築城壁も残る（実見していない）。南壁の調査により、名称のように城壁が重複する複郭である可能性が高いと推定されている。

七重城は遺物の出土状況から、新羅初から統一以後まで継続して使われ、臨津江南岸の新羅の拠点と考えられている。遺物は少量の高句麗系土器をはじめ、新羅系遺物、高麗時代土器片が多数確認され、「七」字銘銘文瓦も出土している。ただ、白種伍論文によれば、七重城では1期（5~6世紀）と2期（7世紀）の高句麗瓦が出土しており、新羅が一貫して支配していたとは言えないようだ。

おおよそ6世紀中葉以後には、臨津江とその支流の漢灘江（ハントンガン）が高句麗・新羅の国境河川であった、と推定されているようだ。

『三国史記』では、善德王七年（638）と武烈王七年（660）に高句麗が七重城を攻撃しており、文武王十一年（667）の「薛仁貴答書」には高句麗の七重城を新羅が攻撃したとある。七重城を巡って激しい攻防戦が繰り返されたのであろう。

西北3km、臨津江が大きく逆U字形に屈曲した地点に六溪土城（ヨックトソン）があり、その前はカヨウル（渡・瀬の意か）と呼ばれる。百濟土器やオンドルを備えた住居から高句麗土器が出土している。報告書（『坡州 六溪土城』京畿道博物館 2006）を頂いたので、次回歩きたい。西に4km強、対岸の瓠蘆古墳（ホロゴル）も見えたらしい。

七重城の西側には臨津江の支流である雪馬川（ソルマチョン）が流れおり、臨津江流域から揚州盆地を経由し漢江流域への主要交通路のひとつ。

ついに臨津江を渡河し、下流の瓠蘆古墳へ。

臨津江流域の高句麗保墨群・他



漣川・瓠蘆古墳（ホロゴル）

瓠蘆古墳への道は現在狭く分りにくいが、城壁が周辺より高くなっているのが目標になる。地域住民には財尾山とも呼ばれるとか。

臨津江は玄武岩台地を流れており、浸食作用により10mを越す垂直断崖が続く所が見られ、小河川が合流する場所では平面が三角形のよう極めて特徴的な地形が形成される。北岸には、この地形を生かした「江岸平地城」と名づけられる高句麗城郭が造られている。西側が先端になり南北の長辺部が崖、東側に城壁を造るというものの、同一プランの城郭が瓠蘆古墳、堂浦城（タンボソン）、隱岱里城（ウンデリソン）と3ヶ所知られている。

発掘からさして時間をおかずに出かけたのか、赤褐色の瓦片・土器片が夥しく落ちており、城内のトレント跡は雨でぬかるんでいた。

瓠蘆古墳については、「東亞日報」(06.9.1)に記事が出たが、周留城出版社（ソウル）が創刊した季刊『韓国の考古学』2006年冬季号に、「概要」が掲載された（シムグァンジュ「臨津江北岸の高句麗要塞 匕蘆古墳」）。蛇足だが、この本は安価だが中味は濃く、カラー写真だけでも得がたい。現在、創刊特集として、「日本古代山城研究の成果と課題」を連載中で、原稿は古代山城研究会が各地の発掘担当者に依頼したものである。

瓠蘆古墳は臨津江河口から遡り、初めて船を使わずに渡れる地点に位置する。開城→徳津山城→文山は漢城への最短距離であるが、騎馬兵を主力に編成された高句麗軍ならば、15kmばかり上流

部分の解釈にあるようである。

(裏面)“先世以来このような刀が無かつたが、百濟の奇生聖音が侯王旨のために作った。後世に伝えよ。”

解説困難文字を次のように解釈している。

「百濟王世子奇生聖音故為倭王旨造傳示後世」
今後とも銘文解釈について論争が続くと思われる。

4. 広開土王碑

広開土王碑の複製は、ベトナム戦争で北爆に使われたB52爆撃機を背景に屋外に展示してある。4面すべてに解説文が付いていて、親切である。

414年に建てられた高さ6.4mのこの碑には、合計1775文字が彫られており、このうち141字は欠落していく判読困難だとのことである(王健群氏の調査)。

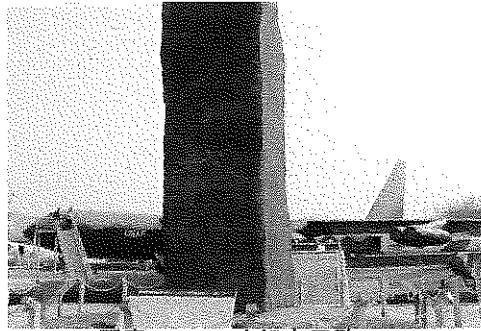


写真2. B52と好太王碑

内容は三つの部分からなり、第一部は高句麗の始祖(鄒牢王、朱蒙)から好太王に至る王位継承について、第二部は好太王が周辺諸国と戦い勝利をおさめ領土を広げ、多くの領民を獲得したことをたたえている。第三部は好太王の遺言にもとづいて設置されたこの墓の墓守や烟戸について詳しく記してあり、高句麗社会的一面を知るため、すこぶる重要なとと言われている。

5. 倭に関する部分の碑文解釈

1870年代後半に高句麗時代の碑として再発見されて以降この碑文の研究が日本・中国・朝鮮半島でなされ様々な成果を生み出している。ただし碑面が荒れて凸凹がひどく、文字のつぶれたところには石灰をつめて補充されており、碑文を写した拓本によって違う字になったり新たに文字が加えられたりしている。

第1面の次の碑文の解釈が争点の一つである。

「百残新羅旧是属民由来朝貢、而倭以辛卯年来渡海破百残■■■羅以為臣民」

「辛卯の年(391年)に倭が海を渡ってきて、百濟や新羅を破り、もって臣民となした」と解釈できる碑文から、日本書紀の記述を確認できるとして、ヤマト政権が4世紀後半に朝鮮半島に大軍を出して、任那日本

府という統治機関を置き、約二世紀にわたって今の伽耶地方を支配したという任那日本府説が説かれ、朝鮮半島南部に対する支配を是認できるとされてきた。しかし戦前の現地遺跡調査では何らの遺跡も出てこず、日本府説は実証できていない。前掲の年表は1993年版ではあるが、まさにこの碑のこの解釈に根拠を置いていることがわかる。

1972年に李進熙氏が日本軍による改ざん説を発表した12年後、1984年には中国の王健群氏が意図的改ざんはなかったと発表。日中韓朝による共同研究が求められているが実現していない。

6. ソウル戦争記念館の碑文の説明文

4面すべてに詳細な解説が付けてあるのに、第1面の問題の部分のみは写真の様に「…(中略)…」となっている。説明版の下部にはまだスペースが残っているので、割り付けの関係ではなく、碑文解釈上の問題で略されたものと思われる。実際の碑面の文字がどうなっていたか確認してこなかったのが残念だ。

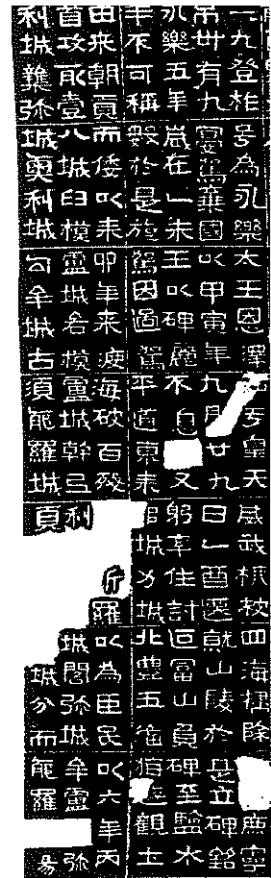


写真3.「酒匂景信雙鉤加墨本」の該当部分

城), 北豊(北豐), 오川□(五備□)로 오 돌아왔다. 백잔(百殘), 신라(新羅)는 을 해왔다. … (중략) …

영락(永樂) 6년(396년) 병신(丙申) 을 토벌하였다. 고구려군이 □□□

写真4. 第1面解説文の(中略)部分

7. むすび

ほぼ時を同じくする4~5世紀の文字遺物の解釈は当然の事ながら韓国側の主張に沿って展示解説されている事が確認できたと言う事であった。(深田晃二)

隔で垂直溝があり、その底部には丸く掘り込まれた確石（礎石）が確認されたことなど。

垂直（縦）溝が作られた山城は数ヶ所知られるが、確石（ファクトル）がセットで確認されたのは初めての例になる。何のために城壁に垂直溝を作るのかは難問で、底部に回転用の確石があることを重視すれば、柱に投石器や弩機のような守城用の武器を設置したのかも知れないとされる。

城壁は調査の後に埋め戻されており、垂直溝の上部は露出していたが確石は実見できなかった。

日本列島の垂直溝の例としては、鬼の城（総社市）の角楼で復原されている。

遺物は瓦片が多く出土し、瓠蘆古墳と製作技法が同じ高勾麗瓦がみられる。新羅系の瓦は高勾麗瓦より多く出土しており、新羅の拠点として継続して使用されたようだ。

漣川・隱空里城（ウンデリソン）

臨津江は咸鏡南道馬息嶺を源流とし、南に流れて堂浦城の東方で漢灘江（ハンタンガン）を併せる。この西流する漢灘江に南流してきた車灘川（チャタンチョン）が合流する地点に隱空里城が立地する。

堂浦城から再び322号線を5kmばかり走ると臨津江（榆淵津）を渡る。臨津江上流の右岸（西岸）にも数ヶ所の高勾麗城郭が点在する。

榆淵津から約10kmで漣川郡全谷。全谷里遺跡は韓国の代表的な旧石器遺跡。朝鮮半島を輪切りにする欽哥嶺構造谷は、元山→鉄原→漣川→全谷→東豆川→議政府を結び、かつての京元線の路線であり、古代では鞍馬の進入路でもある。

隱空里城の平面プランは、瓠蘆古墳・堂浦城と極めて似ている。南壁は漢灘江、北壁は車灘川による崖が形成され、東壁のみ土石混築の城壁を造っており、規模は周長1,005m。

試掘調査で門址3ヶ所、雉城3ヶ所、大型建物址1ヶ所が確認された。

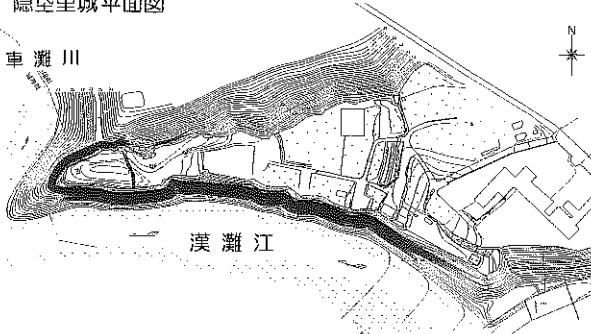
東壁の内壁部分から城壁築城時の柱の痕跡が確認され、2回以上の修築があったとされる。

大型建物址は遺物が出土していないようで、年代も性格も不明。なぜか、瓦は高勾麗系瓦も新羅系瓦も一点も出土していない。

出土遺物は大部分が土器片で、器種も年代も限られている。高勾麗土器片が95%を占め、残りが百濟土器片。新羅土器は見られないようだ。



堂浦城東壁（垂直溝）



駆け足で臨津江流域の高勾麗城郭群の一部を垣間見ただけであるが、三国時代の高勾麗・新羅国境の緊張感を、否応なく現在の国家の緊張と重ね合わせざるを得なかった。

臨津江北岸の瓠蘆古墳・堂浦城・隱空里城は立地も城のプランも酷似しており、当初は高勾麗の南進、6世紀中葉以降は新羅の北進に対峙する拠点であった。確認された遺構・遺物からは瓠蘆古墳・堂浦城は後代まで修築されながら城の機能を持ち続けており、城の位置する渡河地点・交通路は重要な街道であったのであろう。

瓠蘆古墳と徳津山城は高勾麗の高位の将官が配置されていたようである。瓠蘆古墳から出土した遺構・遺物はとりわけ注目される。

七重城は新羅の拠点と考えられる。新羅は百濟国境でも見られるように、重要な地域に比較的規模の大きい山城を単独で築くようである。

II. 漢江流域の高勾麗保塁群

漢江流域の高勾麗保塁群はソウル市東部の漢江北岸（右岸）沿いに立地する。九里市との境界をなす峨嵯山（アチャサン）（阿且山とも表記）には10ヶ所の保塁が残る。峨嵯山は西側の龍馬山、北西の烽火山など周辺山地を含んだ名称になる。

西麓を中浪川、東麓を王宿川が南流し漢江に合流する。全谷→揚州盆地→議政府と南下し、中浪

川に沿えば峨嵯山の西麓に到達する。

峨嵯山・紅蓮峰(ホンリョンボン)保壘

ソウルではもっぱら地下鉄を利用した。足立さん宅は北漢山の南麓、3号線ヨンシンネ駅に近い。

峨嵯山の高句麗堡壘群へは峨嵯山遊園地入口が登り口。5号線阿嵯山駅から北東へ1,300m、初級学校の東隣。途中、キンパッの店あり。

紅蓮峰は峨嵯山塊南端の独立丘陵(海拔126m)。地図で見ると南北が高い南京豆状で、公園入口からの比高約60m。頂上まで5分もあれば。

紅蓮峰1保壘

南側の頂上部が紅蓮峰1保壘。2004年、高麗大により発掘調査された跡はきれいに埋め戻されていた。眼下に漢江が流れ、江南の高層ビル群の陰に風納土城・夢村土城が見える。登山路から外れしており、雉の遊びのを見ながらキンパッなど。

保壘は橢円形で周長120m。それらしき石積みがわずかに見られる。南東隅に雉(ち)がある。

城内で建物址21基、オンドル遺構13基、貯水施設3基、竪穴住居址3基が確認された。

出土遺物は典型的な高句麗土器類と鉄器類で、土器の製作技法は峨嵯山4堡壘と類似する。椀と皿には様々な符号が記される例が多く、「夫」「父」銘が記された例も2点ある。

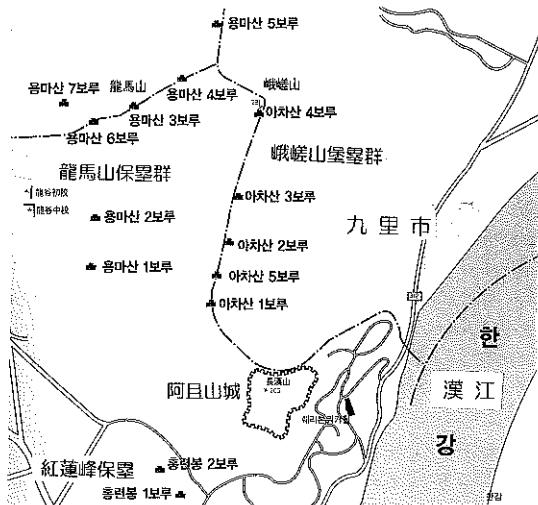
紅蓮峰1保壘では周辺の高句麗保壘群のうち、唯一瓦が出土しており、とりわけ蓮華文軒丸瓦が4点出土したことにより注目される。瓠蘆古窯(ホロゴル)でも触れたように、軒丸瓦は極めて限定された建物に使用されたと考えられている。

紅蓮峰1保壘の築城年代はおよそ500年を前後する頃で、551年(百濟聖王29年・新羅真興王12年)まで使用されたと推定されている。

紅蓮峰2保壘

北側へ約150m離れた頂上部に立地する。高麗大が04~05年に調査した跡が残っていた。以下、『紅蓮峰2保壘 1次発掘調査 略報告』(高麗大学考古環境研究所 2005. 8)による。

この保壘も平面プランは橢円形で、周長約190m。城壁内にさらに石築の周壁が廻り、内部にオンドルをもつ建物址3基、貯水施設2基、推定土器窯、集水・排水施設、出入施設などが確認された。



北西側の出入施設は外部への門址ではなく、外側城壁への入り口と推定され、3段の階段と門礎石1個が確認された。礎石は今も実見できる。出入施設周辺には雉が設置される。

建物址のオンドル・カマドは、L字形のものと直線形の2種類見られる。

遺物は高句麗土器、鉄器類がある。土器には銘文土器3点、耳杯(じはい)もある。鉄器類も多様で鉄矛、矛の石突、鉄鎌、鉄斧など武器類、農工具類、鉄釜などの炊飯用具まで網羅している。

発掘成果として、

i) 「庚子」銘土器が出土し、土器の編年と歴史的状況から、520年と推定され、遺跡の絶対年代が明確になった。

ii) 土器窯跡と推定される遺構が確認された。清原南城谷高句麗遺跡でも窯跡と推定される遺構が見つかっているが、焼成の痕跡がまったく見られない難点がある。窯跡と確定すれば、構造と年代の確実な最初の高句麗土器窯跡になる。

iii) 推定土器窯、「官窯」銘土器片、焼結粘土、再焼成された土器片、鉄器鍛造用鉄鉗(かなばさみ)などの出土から、紅蓮峰遺跡が兵站基地として機能したことが推定され、漢江流域の高句麗軍編制について新たな視野を得たことある。

遺構は埋め戻されておらず、駅からさほど遠くないので早めに出かけられることを。

南側の丘陵には体育施設や軍施設が見えるが、こちらにも高句麗保壘があったと推定されている。さらに南の丘陵(海拔53m)にはソウル大の調査で知られる九宜洞保壘があったが今は痕跡もない。九宜洞保壘からは400余点にも達する高句麗土器類、鉄器類が出土している。

峨嵯山堡壘群・龍馬山保壘群

峨嵯山2堡壘

公園内をしばらく歩くと道が左右に別れる。峨嵯山堡壘群は漢江沿いの尾根上に並んでいたので、右手を登ると峨嵯山2堡壘に出た。左手の階段を登れば1堡壘だった。

2堡壘は主稜線から東に続く峰（海拔276m）に造られている。直径15m程の円形プランで、周長約40m。九宜洞保壘と同規模。未調査。眼下の景観は素晴らしい、登山客も多かった。

峨嵯山3堡壘

稜線の登山路を歩くと3堡壘にぶつかった。峨嵯山頂上とあった（海拔296m）。遺構をシートで全面覆っており、遺跡周辺は雑木で柵を作っている。2007年から整備予定との表示。現在、登山路は遺跡を避けて大回りしている。以下、『峨嵯山3堡壘 1次発掘調査 略報告』（高麗大学校考古環境研究所 2005.12）による。

3堡壘は南北に長い楕円形プランで、城壁の総延長は350m、峨嵯山堡壘群では最大規模になる。城壁の高さは4mと推定される。南側には城壁とつながる出入施設があり、門周辺に雉は造られていない。西南側の城壁と南側の階段式出入施設は比較的よく残っているのを実見できる。

城壁内部には、オンドルをもつ建物址9基、貯蔵施設1基、唐臼（踏み臼）などがあった。

調査成果として、

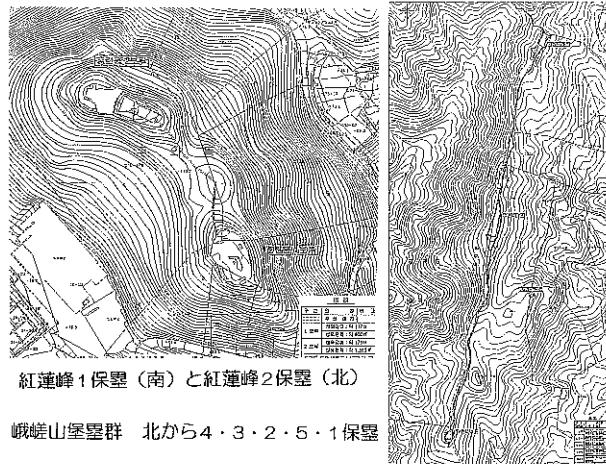
i) 規模（南北12m、幅8m）と構造の明確な階段式の出入施設（門址）を確認。柱跡が見られ、門楼が造られていた可能性が高い。

ii) 唐臼の石臼と杵受けが配置された状態で検出された。安岳3号墳の壁画の唐臼と似ている。発掘による初例であり、最も時代を遡る実物資料で、高句麗の生活史を再現できる重要な資料である、と評価されている。

高麗大学校博物館（6号線）へ遺物が展示されてないか足を運んだが、他の特別展を開催しており、高句麗遺物の展示はなく、図録もなかった。

峨嵯山4堡壘

最北端の峰（海拔286m）に位置する。登山道は龍馬山・忘憂山（マンウサン）保壘群へ続く。



峨嵯山堡壘群 北から4・3・2・5・1保壘

ソウル大の調査で知られる遺構は埋め戻されており、通路と広場になっている。以下、特別展図録『高句麗 漢江流域の高句麗要塞』ソウル大学校博物館 2000、による。

この保壘も長円形プランで規模は210m。東西に1ヶ所ずつの雉が造られている。

城内からは、建物址7基、貯水施設2基、オンドル13基などが確認された。3号建物址には鍛冶場とみられる遺構が残る。

遺物は土器類が26種、538点が主にオンドル遺構周辺から出土した。オンドルの煙筒（煙突）が初めて確認されたのも特筆される。今、渡来系集団の居住を裏付ける遺物としてカマドの煙突（円筒形土器）が注目されている。杯身の深い耳杯も出土しており、風納土城例とは形が相当異なる。

「後部都口兄」「支都兄」「…下官」「口告」など銘文土器も出土し、当時の名前、あるいは末端の官職名ではないかと推測されている。

鉄器類も多様で、武器・馬具・農工具・容器類が319点出土した。武器や青の小札（こざね）、札甲（甲に使う鉄板）などはともかく、馬具や農具は山の頂上から担いで下りたのであろうか。

峨嵯山4堡壘の推定復元模型と出土品は、ソウル大博物館（2号線）と国立中央博物館で見ることができる。大型の煙筒は一見して煙突には見えないが、確かに底は抜けている。

峨嵯山6堡壘（仮称）・5堡壘

龍馬山保壘群へ行こうか、と迷ったが遅くなりそうなので引き返した。途中、城壁の一部が露出していたので見に行き、そのまま山道を行くと峨嵯山3堡壘だった。北端の城壁を見たようである。

3保塁の南100mあたりに唐臼の杵受けが見つかり、6保塁と仮称されている。

さらに南に歩くと5保塁の表示があったので寄る。2保塁とよく似た規模である。なぜか、ソウル市の資料にも記載がない(『ソウル所在 城郭調査報告書』ソウル特別市 2003)。

峨嵯山1堡塁

峨嵯山の南端の峰(海拔250m)に立地する。窪地の周囲に土壘状の高まりが残り、調査前の保塁の状況がよく分る。保塁は楕円形で規模は103m。南東側が登山路により削られており、城壁と思われる石材が見えている。階段の石材も城壁に使われていたものようである。高句麗土器片が周辺で収集されている。

龍馬山保塁群

龍馬山保塁群へは出かけなかったが、龍馬山4保塁あたりにブルーシートが遠望できたので、発掘調査されているのかも知れない。

「東亞日報」(2006.3.23)によれば、龍馬山2保塁がソウル市により発掘調査されている。

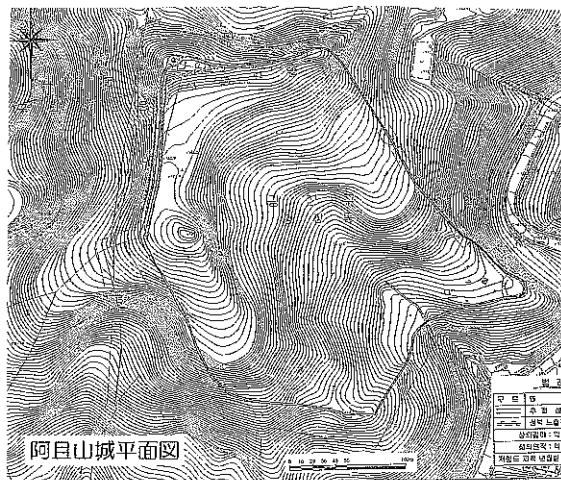
海拔230mの峰に立地する保塁の外郭は地形に従った楕円形で、城壁の周長は110m。遺構はオンドルを備えた建物址4ヶ所以上、貯水施設1ヶ所、排水施設、鍛冶作業場などが確認されており、調査された城壁の写真も掲載されている。

ソウル歴史博物館へ行ってみたが峨嵯山・龍馬山保塁群の資料はなかった。「清渓川」の特別展を開催しており、発掘成果が展示されていた。

臨津江・漢江流域の高句麗保塁群について

両河川流域の高句麗保塁群を見ると、中国東北地方の高句麗山城に比較し、その規模がはなはだ小さいのが印象に残る。何故であろうか。

感想の域を出るものでないが、高句麗は4世紀末～5世紀末、広開土王(在位391～412)、長寿王代(413～491)に大きく南進した。しかしそれ以降、北方での経営に重点を置き、あるいは置かざるを得なくなり、南方に大きな軍事力を持続して割けなくなったのではないか。そのため、小規模保塁群を山上や江辺の要害の地に多く配置し、そこを拠点にして防禦を固めるという方針を採用したのではないかと考えられる。



III. 百濟・新羅の山城

阿且(アチャ)山城

峨嵯山1堡塁から公園入口へ戻る途中、阿且山城へ久しぶりに寄ってみた。ここは、1998年の大晦日に出かけている(『むくげ通信』173 1999)。ウォーカーヒルホテルの方へ行く道である。

以前の有刺鉄線は低い柵に代わっていたが、今も出入禁止の表示。山道沿いの調査された城壁はそのまま残されており実見できる。

阿且山城は包谷式山城で、城壁の周長は1,046m。現在残る城壁は7世紀初、新羅により造られ、城内からは百濟や高句麗と関連する遺構は確認されていない。ただ、限定された調査であったので、将来、百濟・高句麗の遺構が検出される可能性を排除できない、とも言われる。

新羅の山城は、二聖山城(漢江南岸)→阿且山城→揚州大母山城→坡州七重城とつながる。

夢村土城(モンチヨントソン)

漢江の南岸、残丘状の低丘陵(海拔45m)に立地する。平面プランは不整形の円形、周長2,285m。3世紀末～5世紀後半にかけての百濟の土城であるが、王宮関連の遺構は見つかっていない。

城内からは、住居址12基、貯蔵穴30基、建物址、池跡などが調査された。広大な城内でのごく限られた調査であり、まだ実態は不明といえる。

西南地区では、建物址の根石と版築、オンドル址など高句麗関連遺構も出土している。

遺物は土器が15種343個体分出土しており、出土した百濟土器の12%になる。出土土器は儀礼用のものが多いとされる。

夢村土城には夢村土城駅（8号線）から歩いて行った。城内はオリンピック公園になっており、夢村歴史館という子供向け（？）学習施設がある。

前回出かけたのは、まだトレーニングの跡が丘陵に残り、機関銃座に兵隊が配置されていた頃だったので同じ所へ行ったとは思えなかった。

風納土城（ブンナップトソン）

風納土城には臨津江の後に出かけた。山田隆文さん（檀考研）のご縁である。「風納土城 197番地一帯 3次発掘調査」は、韓国内で最古の道路と推定される遺構が検出され、新聞にも大きく取りあげられた。申鍾國（国立文化財研究所）さんの案内で見たが、はなはだ聞き取り能力不足。

以下、頂いた「略報」による。季刊『韓国の考古学』2006年秋号にも再録されている。

調査成果（06年11月段階）として遺構では、住居址5基、カマド7基、竪穴60基、推定道路2基、石列施設6基などと、多数の遺物が出土した。

i) 調査地域は西城壁に近接しており、城壁下部の検出が期待されたが、確認されなかった。

ii) 遺構はおよそ3段階の文化層に別れる。I期は硬質無文土器が主流をなす時期で、遺構は竪穴と埋納遺構などでさほど多くない。II期は百濟漢城期の早い時期に該当する。道路遺構、各種石築遺構、廐棄竪穴、推定盛土層など一般生活遺構とはみられない。城内の特殊な公共施設に関する空間と推定される。III期は漢城期の遅い時期で、II期の遺構を破壊して住居址、竪穴を主とする一般生活遺構に変化している。

iii) 国内最古の道路遺構が確認された。南北道路の確認距離41m、溝幅7.5~8m、路面幅4.5~5m。石敷きで、中央部がレンズ状に厚くなる。東西道路の残存長22m。

iv) II期の遺構には川原石や割石を使い築造した痕跡が多く見られる。とくに西南辺に集中しており、大型の公共施設物の存在を推定できる。

v) III期の住居址はすべて方形で、比較的小型になる。下層の六角形住居址とは様相を異にする。高杯、三足器、広口長頸壺などが多数出土し、土器相の変化、層位的把握が可能である。

vi) 出土遺物は主として土器類・瓦類で数万点になり、とくに1号竪穴では瓦が数千点に達する。瓦の製作技法や変遷過程を把握できる。

風納土城内の資料展示室に寄り、カマドのU字形土製品（竈枠装飾）などを見る。江南からソウル大西方の虎岩（ホアム）山城の城下を抜けて仁川へ。

虎岩山城からは「仍伐内力只内末口口口」銘の青銅製さじが井戸跡から出土しており、『三国史記』地理志の高句麗・仍伐奴（内）縣と関連する遺物とされる。出土土器の大部分は統一新羅時代である。文字瓦も多い。城周1,250m。

仁川・桂陽（ケヤン）山城

京釜線・国道1号線を見下ろすのが虎岩山城ならば、さらに海岸よりに位置するのが桂陽山城。金浦空港の西の山で、対岸には幸州山城がある。

鉄塔が目立つ桂陽山（海拔395m）の東に延びる尾根の中腹（海拔202m）に立地する。

ここも山登りを楽しむ人が多い山城で、史跡整備が進められており、民墓が撤去されつつあった。六角亭（展望台）のあたりには比較的高い城壁が残る。城周1,180m。3次調査（集水井）が6月に終わり、埋め戻されていた。李亨求（ソムン大）氏が季刊『韓国の考古学』創刊号に寄稿されている（「仁川桂陽山城 3次発掘 報告」2006）。

2005年の2次調査では、東門推定地と内側の集水井が発掘された。城壁は内外夾築で、外壁は長方形の面石を水平に揃えた、いわゆる‘品’字形に築造されていた。「集水井からは丸底短頸壺と五角形木簡など漢城百濟時代の遺物が出土し注目を浴びた」とある。この五角形木簡は韓国では飛び抜けて古い4世紀代とされた。城壁も百濟により築城されたと読めるが、どうであろう。

この觚（こ）と呼ばれる木簡については詳細な検討がなされている（橋本繁「古代朝鮮半島における『論語』の受容」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター、同「金海出土『論語』木簡と新羅社会」『朝鮮学報』193 2004）。

復元すれば1mを越すような長大な木簡の5面に『論語』を書き写し、丸暗記のための教材に使ったと推測されている。時期は新羅が中級官僚を育成するために国学を設置する7世紀半ばでないか、と考えられている。

古代日本において渡来系集団がその知識を發揮した分野に文筆・記録がある。その知識の習得・継承にこのような方法も有効かもしれない、と想像する。日本の古代山城で出土することを。